特55

283

古藝獨居影芸

中村福助題字

好劇山人著

一名

特55
283

地聲色づかいの方の心得

○成田屋は言語爽かにして力こゝ走りなる方宇一鼻へかけ体を前へ屈め出し首を振る心持にて遣ふべし○新駒屋は含みを以て言ふべく遣べし

○音羽屋は言語さびたる方セリフの正り安身になりて遣ふべし○三河屋はげん武にかたしたる方折々ソゝと云ふ様なる呂りあり○成駒屋はセリフの初めくを正しくハーくと云ふくせを取るべし○高島屋は強ーく折々ウーム〜〜とうなるやうなくせあり（余ハ異各人）総て右の心得に今のくせをよく取りて遣へば自然といろものなり

好劇山人志るす

易

棋谷

本書見出目録

(一丁) 仲の町さや当の場
(九丁) 去ら浪五人男
(十三丁) 勘平内の場
(十六丁) 由良の助去ら波の場
(十七丁) 清心すみ田川の場
(十八丁) 男の助内か下の場
(十九丁) 覚犯よーの山の場
(九丁) 入ぞめ三五郎浜町の場
(廿丁) 小ぢばの娘小車内の場
(廿二丁) 大寺忠臣内の場
(廿四丁) くまゞ谷次郎扇やの場
(廿五丁) 朝比奈たゐめんの場
(廿六丁) 岩ふじ乃奥にこの場
(廿七丁) だんまのお百六万場の場
(廿三丁) 松浦寺さゝ内の場
(廿三丁) おさろもみ田川の場
(廿四丁) 大時姉川所門の場
(廿九丁) 小まつはてみさ川の場
(卅丁) 助六仲の町の場
(卅三丁) 切与三げん店の場
(卅三丁) 伊達たいけつの場

歌舞伎座初春狂言

仲の町茶屋の場

不破伴左衛門　市川團十郎
侍従や　中村福助
お辰　尾上菊五郎

(伴)遠うふ人ものの名家ものなくい家て国まもなく人ふ人の白拍子通ひ出端の天つとハいれ花道まで極楽浄土山歌舞伎の養傷の君達がめかるゝ出おそ者ふいまゝ天女あまやり若殿かゝる仲の町色ふ色ゝ中へごろ付頭ハ雷の(伴)これを知らずや稲妻の始まり見か不破の笑せきにせかれて固せき笑ゝ居れてかゝるまにさり(山)ぬれる心の傘ふ濡ぐらかそふ濡つゞめぬれにぞぬれ彼君と(伴)ぐらべ牡丹の風俗ハ(山)ト岩上

秩父のかつら（伴）西に富士ゞ嶺（山）北は筑波（伴）思ひくらべん（両人）侍達
小袖（山）万のこぢりとらへしお方なんと呂ゝ（伴）是ゆこなたへはめん
かされい男は此廓へ通ひつめ出世だゝら大盡どんゝ知られてやこの
枕に書ばゝり月花かなおとして枕機まくらもゆふたる仲の町此
住居ゝよけずして仇で男はゞ此鞘へ武士の鞘當接拵さつせ（山）そり
やおの方より中奉大道廣き道中と書物類のゝ法ゝ一や男の世話
接拵枕も書て稲荷ゝいもおやゆのそのえん（伴）今吉原にかくれなき
栖狙の名出閑心を忍ぶ富士築波心に遠へはやゝ雲ふ接が数
剣の稲荷（山）を接拵とえおとかわり面の俤る花も風の夜もかゝひ曲

輪の上林枕るの契りもたへず恋てあけるわび寝き音城とつぼりぬ
れんぬれつがめ無法者仲の初遠ひとけてとれにもこひの道（伴）そこで
主使通さぬゞ白栖狙の道衆の主地づく（山）白栖狙の俤市川ゝ小敬さハ
おいやれど泣いたーかふ付ゝ三つ引ひとれれど恋揚かつらふ（伴）主
意こそおゞへゝ苦一男の笑ゝ恋ゝ侍ゝ恋ゝ名ゝ恋ゝ三
と見ぬいておいて（山）面をとひ同衆業廓主廓の面お（伴）やゝ浪人の
こゝたの面もマ（伴）ゝ（山）ゝ（伴）ゝ（両人）イザ（両人）イザ〳〵（伴）
ふに遠ハぬ名古屋ゝ（山）ゝ恋ゝ名ゝ破の俤ゝ三つ（伴）絶ゝ人ゝ恋ゝ対面
に（山）場所もおゝいとゝ（伴）ゝ中ゝ恋ゝ（山）打枕機と吉原に（伴）

よしや男の名古屋山。今の寺西氏伴。打旅こそで。両人。是ひ半
た山。そ行遠の稲荷ぎ屋とたつた此場合シ方まを見おハ伺の用ぞ
ざつてか伴。名古屋公の用とハ別義でかいさ元の別染ぞかよひつめ
たる蓄城と弟ぎあいかたて業ひたい山。を義でごさらバ相おらぬいつ
たん弱せーアノ女たと〳〵水をが有まるとし伴。イヤかゝぬ某ーだカ
にかけとも蓄城はヤ来ますゝらぬ水を稲心汚を。ろに山。業ひかゝられ
待の迷ちぶ半為へ。ア子と弟したけれどそりやかゝぬ伴。あらぬとあら
バ為敵の事に稲荷敵の鬼り山。平ぞ公の敵の稲荷の主為方に山三めぎ弟
に後あゝる陽意弟のあぎさや仲の町伴。ぎ色とあまり答り色義ー

ーてを打て見せるハ是非ぎ山。決ーてあゝぬ伴。あらぬとあらば出
敵ホ山。合をになつて〇山。そちや伝懐を立たつどやかいか伴。いらぬ女
のさ〳〵へだて山。怪部せぬうちに両人。退たー〳〵。お辰。イヤ、エのかれぬお
ふたりさん私ーもたぶの女子あらヲ、こそなんぞと色国ゝーとそ見
ぬ振ぎ女の性そこをなくぬぎ私ーの持まゝ水をの水で育つたお辰勿
の山へ摘茶にあさ女房元余ぎ伴月ハ移脳のーやりかゝべ宅国ーお
はへかゝるを鍬学を人知れずひあのちをこれ成国為さんとお一人ハ
音羽屋さん式いさういハお豆に水をのれへずつ四りと流ーて私ーおれ
さんせ私ーぎ異ふてお二人さん流ーてやさんせいナア伴。スリヤ

主方ハ嘆ある山廻て名ゞその(お辰)おてんば者の私しゞ拐ゞお怪ゞの
あいうち此白刃(山)引とあるゆゝ山をめハ(伴)引ゆなゝ者共もとも二お。
辰私しを主て山。此所を結けて(伴)白刃ハ主使(山)イザ(両人)イザ〜〜(伴)
抜た白刃を此傷に血をぬずおさめる仕様ゝするか(お辰)コリヤ有主
お洞此傷の主恨ハ必ずとも蔦様さんの[illegible]ゆゝ事起けたるおふだり
さん粹と通とゞり合けんくせあらふそれバ此さとへ通ぬ者ゞ通
ぞかー箱根ゆゆに邪慕とゞ化物もない世のたゝ夫と互ひに言葉り
とやかふ云ハ大きゆ邪慕粹とゆさを使に別れた上で心ある女敵
衆をくどいて色容ゆるものゞやつぱり縁お二人さんも主通り仕をめて

此主理結様主人てんやーやん世(伴)いか様ハれて見れゞを通り主の
立ぬハ當座の事を通へに見あゞつて(山)邪慕ハ禁忌仕ゆも水上流ゆく
者系の様とはにて主恨ハ[illegible]ゆの(伴)なれ世抜く此白刃武士ゞ無を見
ずおさめてハ刃の[illegible]ゆゝ(お辰)おきて主ずバ納する様中へ達入と私ー
ゞ仕様お二人さんの白刃と白刃コリヤ主方へ引ゆて(山)山主ゞ白刃を使
方主つへ(伴)刃世ゞ白刃と山三方へ(お辰)取達へてもお二人の主所拐の
さやハやつぱりを使ゝのたまーひ取ゆるハいく此傷の孟ゞハり見ふ
納める私しゞ仲人(伴)イヽヤ刃世ハ浪人のたまーひなゞらも此白刃山
三ゞ方へハ(お辰)夫でハやつぱりおひゞとけぬ様子のあゆくのお洞見

非共心と（伴）イヤ夫ばかりハ（山）沼心ゐくべ白丸の納まり血を見る心ろ
（お辰）夫ゞ如ゝ依て私者ゞ頼り思心さん是非共部けて下さん せ（伴）女色
もお辰ゞ個及吉てもゐるまい然らば此場で此白丸（山）沼心あらば山と
ゞ白丸も（伴）互ひに丸まーひ取替て（お辰）西き恨のこゝぬ盃ゞわり（山）イ
ザ（伴）イザ（両人）イザ〜〜〜（伴）そんゐくさやハ（山）高丸互ひに（お辰）西西
指のさやへ見ふ相るお互ひに（伴）弱りゞたき山之ゞ白丸（山）俵を結つゞ
ゐかゐ吹もそ俵（伴）ぜ天すと）も遠のふ（山）一つくり意八法陽揚を振の
を一揚ハ親人と何て立退く曲者かさすれバもしや敵の手掛り（お辰）廿
刀よかけて出るのまるう（山）おもていそけてもんの内ゐ（伴）とけぬハや

つハり首懸ゞ（お辰）こひの主恨ハまさいつでも（山）むれの不むくゐ沼交
の（伴）を稲毒の不破名古屋（お辰）互ひに不破の関こへて（山）中を捨ぶの名
古屋等ひすひゐかたき（伴）や（お辰）サかたき捉ハ大門の山（実ハ白るこド
まゞゆるされ必（伴）伊ゞどいくひ（山）れいハ重て（お辰）おをい内ゝ（伴）（山）
世話であつゝ（お辰）ハイおそハさん（伴）（山）を目ゆゝりと（お辰）ありゞゝ
ふムり外

白浪五人男の内　日本弦左ヱつ　市川團十郎

問れて名のるも恥ず呼ゲ間敷ゞ奉れハ遠州浜松在十四の年柄祝に見る
忠義の業も白浪の仲を越たる抱働盗ハするゞ非道をせぬ人に情を

ケ川栖雲を怒て宿ごで義経と浮る扨に四ツ屋の茶屋のたゝいおー
浮世ゝ男の後界も最早四十に人月の宮めの僅五十年六千余町に原の
義経後の首伝日本孤右エ門

白浜五人男の内　後て小揺菊と助　尾上菊五郎

扨て次八江の島の名所流の見上り平家著列一ツ袖ゝら船も畑田ゝ
田舞を浦打込む浦ゝ蓄と女に化て筒持せ油断の有ゝ小姫も袋
坂ゝ男の破悪い浦名も紙の口上のあゝへも二度三度どんぐ数ゝ書
屋名八情様の氏ゝ子逢金善宿と庭書も嬉ゝ育ゝて名さく狐
を小揺菊の助

白浜五人男の内　忠伝利平　市川八百蔵

疑て跡に扣しゝ月の武蔵の江戸有子供の打掛ゝ せぐ悪く接ゝ
らぐ見ゝ ゝ様をかせぎに西国と四て貴尾も春野ぐまぶ有供ゝ
大蔵に見と思ゝる左ゝ口の赤墓打と云てちゝや豪郎逆入り込姿ゝ
る金ゝ書嶽の罪科八毛様の場の二重三重紫悪ゝ見ゝる花ゝ跡を
かくせし判官の名前かゝりの忠のぶ利平

白浜五人男の内　赤星十三郎　市川栄蔵

又ゝ次ゝ連ゝ有ゝ八ゝ前ゝ八武家の中小姓衣ゝ家の茶ゝ切取も連ゝ平の市
越や祇上ゝ家に分の緒と研ゝ上ゝも抜ゝ無ゝ逆ゝ心の源孫樹の新八つ

七郎右衛門水掻の口取栖を半若と名も高く恐ぶ姿七人の目に月影ゆ
つみ越ぐ嶽を日ぞ余の眺方に清る間をき星月夜を名も素晴
三段

白浪五人男の内　南々カ九　市川左團次

扨どん尻に拍べ一ハ沙風あらき小勢の磯別松の蔭りあり人に成たる
演者仁義の道も白川の粗舟へのり込舟盗人浪に輝稲妻の白刃に威
す人殺脅奪て金を奪ぬ罪科ハ金に目くらむ名悪るふる里と云栖ハ伊
場で仕業ハ木の空と覚欺公慾て暗き沢蛇一蛇ハ刃に知ぬ念佛ぎら
ひる南ら力丸（駄右エ門）五ツ連たる厂の五人男に像て（菊之助）桜に お遠の顔

ぶれハ徳兵衛の五人連（利平）を名もとぐろく雷の書ふひぐきー都くハ
十三ふ人あ変りの玄中で極印打さかーにぶん（カ九）を へか布儀ら盗
人の扱笑きい組つ魂（駄右エ門）かくを栖ま（五人）かくめを見ろ

黒塚勘平　内の場　坂東家橘

コレハ〳〵出来府丹兄ぐるーき勘平ぐあぞら家へまふこそ出来ア
ーイヤづんウぐさていあ内しよおとおかまいあくともイザまづあま
イザお通り被下此度夜の出大ふまえぐまたるハ抜ぐ手ーしのあや
ずりゆーひかんこもあーのとぞ素ぐごダ弟教ーのつて亡霊の出稼
ぶ場家ぎ もろともふおつとむるように出来所のおとりあーー働ふ

経蓋るアヽイヤ恐ばらく〳〵此刃のえどにともかくも亡君様そん冥
の恥辱とゆうべ一ト通り中開うんおかまぢつておきこれが根せ
ん孫五郎殿とお目おうり金子てうだうとりけたまゆりにかゆそう
へるくらまぎれ金二つ五郎殿打とめかけようてきぐ
り足金ば指こへあんだで様(あむ)三宮ゆうさう茶ハかきかと懐中とさぐ
ーーえれバまゆさるハ金紙者ちあくぬすあ五ども天より目五
まあくゆ金とまぐにえせりふどのよ彼を口くーー五面つをよ
うまときけば金さけかや金ハ女房きつてこうちとめさるハ(是ヨリ切ハラ)
ハ思入レ)ハアッヽ〳〵〳〵アヽ恐ふと殿(ドウ、クルシキ、キモイイレニテ)いかあ五バとそ

勘平ハ主君思ひがちやくゆとは世代と後金の口ふちおうけ色ふけり
てとのさまの大ゆの恩為こまあり金さずまを大ぐつこをそうだつの金
ゆかへつて石ゆ程まきるなすゆ多いまかのをし程遠ふとゆく式
うんまつきたる勘平ゆ心の目のくるーきを五推ゆをうあ五所ゆ
だナニ母ドやくおうたゆひいえ五ーたうを面所都要名ハ時ゆまーと
うチヱヽかたゆけあ一是をめいい逢の思ひおとー跡より遅付しうゆ顔
死ゆきん逢と体ゆんをテ〳〵ま性名ハ誰と来名ホヽヲ心汚さりサ
アーッうと血判仕ッさテヽ疑し和香や我ゆ五アたり母ゆ和人なげ
いてやきるなーうこのさいごゆも女房ゆの妻ゆも反古ゆハ御ゆ数五

一味徒とうの所用金ヤア傳果おぞとハけがらわ〜死ぬ〜魂魄この
土とゞまつて敵うちの所供おさいでおくべきうナア

大星由良之助　　城こと〜しの場　　市川團十郎

ヤレ読もつくゝ見て〜よこのうくゝあつて是利敵へ引べき謂ハ今ら改恐あり
勿体ない血きを疾る鄙夷のゆう今九寸五郎が侵奔に迷されおれ面へ刃
向ハ石と抱いてそちに陥むゞやーイヤあやしう〜ケ様の所業ハ一類
も再意も会に金と入五へう儀あるべき義でハる今九寸五郎が国の中に
悔と枕に打死と申ス国に引ゝ人とお金えい分あゝバ知れたに為ス五
ようたでムらふゞや様と抱に打死家ん老ゞ一面二面の名〆数に関

係ゝや今打死して亡君のお欣びあるべきやサ〜短りよ功と家ゞのたと
へハテ了簡ゞ差い〜

清心後に鬼前清吉　　きよみゞ川の場　　尾上菊五郎

是差〜も殿さまゞ殺〜ル会狭ハ主の刀で自さう腹切ったる
十ハ程やを者も共に死おゞ逢是差国ゞ之の罪亡〜ソウジヤ〜○侍
〜侍よ今日十ゝい花ゞ月を殺さも又必差〜もの堂と取殺〜ル事と知て
屋のハお月様と已行りゞ人名僧五十年前尾張ゞ行バ又十年二十年も
生延とつゞ是とすきとふ刃の上でも生きさ人あゞ出来る事と国ゞなく形よ
うにさハいで暮すゞ人の徳一人殺すも多人殺すも取ゞ事ハ口へ

だ一つ迚も悪ずと仕あて栖八是栖拐盗屋尻切人の栖八盗賊と栄や
う栄むと者ゝの憑此奴めつゝ江戸乞ぬワへ

荒獅子男白浪　　中の場　　市川新蔵

アヽこの中しやナア五十四ぐん小人もあるなとゝ[illegible]ふだい
の忠臣なら男の面てゐ人でがねへゝだらのきんけんふようつゝ君の庄
めどうりとゝぎけらゑごきんじよのゆかさにとのいるをとゆ右
らぎゝてうがひよとるゝぞ簡めうぬもたぐの移つゝどゆアある
めゝうてにおゞへのちからこぶとゝぞんにきゝへゝ此てうぜんくらゼ
ぬうちにを一書きりゝおいできへてなくゐ江工

横川語司芸能　　よゝの山のむ　　中村芝鶴

鍛冶ゝるゝぞちの眼ゝ刀制去芸つゝ付とゝんと軍義と志ゝとりかゝめ
どゝ御書未のえの夫をゝで天物つぶでかゝ少へより義来ゝ雪ゝ者り
ごゝ[illegible]ゝ生ゝまゝひうゝもの義ゝ付ゝゝ乗りこゝゝ入れ者
るゝ鞠の者ゝ鍛ゝゝもゝめるゝ名のれへゝげさらゝ見ゝ者ゝ義ゝ
刀鍛も白鳥の[illegible]ゝ付てゝゝげ者りしゝたゝしハあれゝるゝから者ゝよか
ゝを一のんでおるゝのかゝゝば、へ義つゝてゝうかゝひ見ん

人力武入蓑の三郎　　はま子四郎のむ　　市川左団次

ゝゝまゝゝかまゝてゝうゝ年あとおめへといつ一ゝ主をゝうついゝおゝアい江蓑

の三五郎ぐオイぶ天狗爲へかけ孫へおめへまやアあまッ切りあハ
孫へぐおまもあぐミの時かうらまりビやア人ま知らまたぶぞうまぐ
徳川家のそのいぜんまものとき板の石ろ也ぎで伊名間へ送ま為揚
くぐ面そくあうつこ上まぐぬけ孫へ入まま世うまりも善く又その
後知恵再拒と度重り四幕ぐらハとまのま音の孫へのもは一新の
時流の時代まあまぐたい人数ーと必付を住ねへのでみてびーや波
へあらまたが丈うらまつぞり投げてはめてかま氣の人力ひき汗
とたビて一里ひてもどるのハまふーハ百ろ二ぐがせきのやまだぐその
者ーまをまるかハりまを拒るハらくーまを延ーぐを時る者ビても

ちつとも古まのまの孫へ来ぐ分ーまつたのよ

小柴金之助小幸　肉の心　中村福助

今さらのふもぐちなぐらいおんを言ーぐ恵のふき女人のうまきま遠
ろく悪傷ぐらまろ国ぐれ右の心まを活死を来まるまなろ今二度
なぜまあふてへくださりまを必いろ忠義といーなぐらこさ四てた
てー味とせの名目ハ仮のまなぐず百第筆もかまビとおもふおうま
まれまのれあまこを来れ金を外色ぐくれハおいおどま父まま
へハまを孫どもぐまちぐの外ーその中へおまひもまり四ビ組ごいたと
へおーづぐまを名でもどふ汐ぐ来るべきぞとあつて汐ぐせぬぬハ父

上さまよハいさい郭ときつてえなせ〜おことバとこの郭よかゝるふ
孝の羅こりやどこぶ〜たらよろらふぞいナア

大寺正兵衛　内のた　市川團十郎

めいのもめ〜ゲをいりやりの通り頼とれかゝ極楽ら〜志どうをこ
おさ感つこそふ両ハおゑゲ盗んだこりやう素〜やアえゑせ孫〜ゲ盗
人代下ぞんよ三ふ面ハお移ろなゆゑ面でもためちやアめつたよ盗
めるものゞやア孫〜ゝふ爰らゲてふどやめ肭と仲ケ百中〜ゑけてやり
星をあゝつてきを金からおもひ付てのかゝ付ア五寸あかゝまもあん
ぎゑものゝやア利星もこぶ月切ゑゝておこゆ〜伝〜こ人ぎもい

ゑ星今ゞやア星ゑ黄たものせ〜見んむきも仕孫〜かゝ氣よ放ゑだ丸一
人りうたゞゝよものあゝ枕とゑるこ藤こいたゞ天ゑさゑゞやゆうさ孫〜ゝゆ
りあゝたゝゝきの封金郭のものゆゝ志ゆをきうゞこゝゞこ逆いえる
ゲんこゝゆらゑたゞの名ゝしかゝうそてゆうての見前のゞれぬるゆ〜ゆう
ゝたゞゝこ〜ゝもいうかゞゝこゝモウうかゝ〜こゑ土地よおゑ〜ゆゑこと
めゝゑ相〜振〜おかけてもこの盗〜氣ゞゝうまけて云かゝニヤアかゝ〜
やアゝ孫〜ゲこゝふ面ゆゑ〜ゆゝ百ク三百のゝらゞゝこめゝゝきふ
かゝ志やゞよいる門一日でゆうまひものでえたんと喰ひ上げゝこゝ落
るゞゝ必ず気よヤア付相〜かゞ堅氣に成ふと思ゝゆよ四百兵衛

ぐいくをかだサア此金をあきらめるからもつて間夫とも御ぶ
とあてどうしておくとおもへて不孝者とあめへもおまへこれなぢでどや
るところまでやつてこそとて格子ハあくまでさんたくみのとどやア死
神くるくるめくるくるかおまへがだくらいつ所よりとつとと格子いく
つまでもこんでかつてろう

誠心谷次郎直実　あつまぬのまと　市川九蔵

ハテ下さげに物と三伝は在和家ばかりと雪丸と名の陰儀者
の左文敦盛ぐるぐるぐるぐるぐるや夫をさーおまへ由奈さ女の改め主アー色覚
ぜよあの女ら孫ちろぐ三付ちるハ一人ぶ身ょ那印彼奴敦盛ら極ぶ

柄に敬へきぐ左も義四ハ主ぶる女孔に手を入ぶ肌を隠す不義者と
よぶ三あぶ悪名流ないく孔三ぶ遣付大多ぶ敦ぶるやら取別大多の
ハ名の三伝の腹ぶるぶハ心付ぶぐ好義と到ぶハ主元のお為と存ぐる
故一礼も有ぶぐさーお答ハイヤハヤめいぶぐ千万ぶ義でムる

級比奈三郎　たおめんの場　市川左團次

如何のともぶ三ぶ取拵て三ぶでハきたぐ鈴法ぶも親父とちぐふでぶん
ブマムコトズイ市川流三ぶをムひノ言表内の宣敦ホツタノ表業猿
ぐぶもぶ本タラぬち表の日おくんぐさーみのなぐ三ぶへ一だんお三ぶ三ぶ
ともたしてあつてやつちやアそんさるめへら

義貞奥庭殺しの場

合巻　五岩茂　市川権十郎
下女お初　中村福助

（豈）ハテ心得ぬと迄ゝ云ふあの性ゞ一度に出ハ心得ぬなまゝ申ふ
来ると思ハ是ぞ夫に居ハなまゝ下女の右ゝ（初）ハイ私でハ是ぞ（豈）私と
ハ誰ぞ（初）ハイ初でハ生外る（豈）何ぞ初ぞ私ハ又大ゝと思ふて傍ぞの豈
ゝ来ぬ此奥庭ゝを免て此所へ来のぞや（初）ハイ誰もの（豈）ハ殺し
ませ殺どお爲様にチトお役ゞはり外る故おゝりを待ゝ出でお教へ
より外ふと存ゝ出ゝを見ぞ爲お家敵の仕法式と書き面ゝ出を
乗り面ゝでござり外る（豈）此岩蔭に名刀用ゞ爲敵に夫で此おゝ屋ぞ（初）

よゝゝの思で乗り外てござ生外る（豈）シテをちゞ殺と云ハ（初）主殺ハ
（豈）きりゝゝぬかせ（初）私の主（尾上）ゞ指南のしやくゞ是迄外て一向に
鄭ゞ付外ぬもゝんのゝゞはり外ていハ私天りゞ出ぞうはり外る敵あ
と撰へお殺に乗り外に俳優尾上ゞ敵や迄おゝ遊て病きの様子の噂を
を出ぞうまゝてやきり外ふ加ゝぶ殺ゞ外る（豈）何ぞ尾上爲ゞ指び
やうゞ是ハ（豈）で鄭ゞ付ぬとうそんなゝ是でものゝ主ぞゞ好ゝいの
ふ（初）夫に乗ハはゝり外ぬゞ一向心ゞ付外ぬ敵外ぞ初母様にハ誘ゝ
うかおゝをお指加ゝまゝてお遊はゝまゝ此のゝ夫を水にゝうゝて上ゝ成はり
外る何ぞゝ出ゝ加ゝまゝて許ゝ生（豈）ハテ夫ハ鄭の妻ゝ加ゝゞ私ハ

其様なお言葉を承りましては居られませんの〔初〕何の勿躰ない仰り升る和女が其の
と仰ると旦那様迄お案じ遊ばすが私が好んで居り升る〔岩〕左様か
初とした事が何の持ちて居られない程人の為に難儀致して何だか
やないの〔初〕サア其人の為に念じて居り升る程お出しなされて
くださりませ〔岩〕エ、何ひとつ云ふ事と言ては〔初〕イ、エ其様な事では御座りません
〔岩〕ソリヤ何かひのふ〔初〕旭の弥陀の御利益〔岩〕何と言やる〔初〕夫と申しまして
お備やして参り升く〔岩〕スリヤ此の頃の弥陀の御利益を受けて居り升
よして〔初〕お座りたいと参りましたも和女のお側へ来まして此の縁を
ちく〜と幾度お願しやたと御見申して参り升る夜中もいとひ無く

り升と何とお有様がお病に遊ばさぬも則ちお家の御存知と存じ升る〔岩〕
天理王にいやるものを明神の病気と存じますれぬも後日の不念いか
にも様子を見届け升ろアイヤ〜今は何と申せいのふ〔初〕そりやお又
おぜで嘘り升る〔岩〕私は持病の頭痛が急に発てかアイタ、サア是じや
に依てマア和女は先へ行やいのふ〔初〕そんなら和女様にはお頭痛で嘘り
升るか又ホハ好お守が嘘り升る〔岩〕シテ其守は〔初〕則ち是で嘘り升る〔岩〕コ
リヤ夢りじや無か〔初〕和女の頭痛の呪咀にハ此守りが相応と存じ
升る〔岩〕だまれ最前より和手に於て居ればつけ上りのした慮外者たとへ
屁よが病気であろふが何で妾が構ふか不女の分としてかたい己が差出

た汁で最善好も試合におくれを取せたるコリヤやひとりがうの尾上
めハ大切柴長者清を孫長させた白藤ゑひめ長様よりお新りの地の名
ぞうもおゝうたんに盗まれて長ひけ長に白裏してくたべてと病氣
とゑ長者様に執事しを姫君様の御前をうとゑのうそりや柴
奴コリヤまでハ己も図太くやぞ初アくモウシめつたるるを仰れ外る
加豆茶りとおて己が来ハおふうたた尾上のはうくに笑たのうそんなら
様子ハ少たでゑふ来組此茶りで岩友が打ゑ敷た己もいつよに初
コリヤ是ハ最地の茶ぞう嬢しやは是とくふ外に和女の自由に放て
居たサア是捕ハ主人尾上が最期の怨を社晴す覚悟しや

だつきのお百　いまん坪の場　沢村源之助

ヲイ流石清さんおめへがいくらどるつても人異れ変ゑてこうつ不多
でハロくくとおつゆアとゑの地流と三人ぎりをごこ変をいふよゝ
だがだつきのお百といとやりでとり是ずで人をだゝたがシッポを
見せたるハれ十四の年かくくハあるゝへあずづかいろくをこんて
あげくがおめくとたくしこそいやか目うけもようくとくかくどうく
考ごとせめさいあるとかんまえくこそさかれへがのきとえくんざり
ん月ふおめへが安房いくるひ死をれくく跡がきてくざんまひあげくの
えてが考もつまてて系大坂とへめがりて今ごやアはどでけいしやのふさん

三ごくあつたぜお百ぢやいのもろろの教はるこまぢぐちぐちの
おめりけでとふとりおとすいきおひよあつそあしどあまのぐ巻き
でのかげら憑ぞ情さん日さしのお世さけんぶつおしおさへヨ

幻津孝兵衛　内の場

尾上菊五郎

いろ脱る浮世の図果ゑ牡丹まして今るまどお酒ら味ま乙ども人
りんの五常の道を堅くせり恵ひこころハもれれども世のせいせい
と身のうん人の道あよ仕別ぎる商法ぬして資本をしおいま
くらん金も何ぞや無ぬかば者よかしめら乙ついよとわくる為と
祭り乙いらくあてい情一人りたづ祢てくれ乙ろもなく見さげ果た

る浅薄の人情くる中も伝義おるいせんの友の廉金ぐ業と張ぶの
とおーへてくれ乙を礼と今日身まぎと原接五人ぐ命乞をたのざと
めーもるまぐつぐき義ぐ義浪のかやそからとの吉を改とのこーて
死よ重取しーの都落命日法祝子ぐ伝心ぬ水天宮の利やくこそ
夕教をるぐ法二人りとも幸ひを泊てうれーやとろこぶ甲非条情
けかやアノ金音楽もつて行乙祇ぬも見をてらをたるり世ともえ
うかひ身のよどやおア

下女おはつ　走み田川の場

中村福助

祢もをりとそそを日にかぎつて此お送生くと云てハ夏も性ぬの

ゝ今の人のこゝに御るゝ計り先に御屋で時様のお話の様子と
云ひ何時にかこつて何じややらを和く〳〵とーたる友の様子尾上様
のお身の上に何やら子細ゲアー遠ざこもないく〳〵思ひ切て此事よから
盛に向ろうりたゞ又何様お急ぎ用ろも知ずハテ何仕こ
物でおそふなアレ〳〵あの高名なつのひて世と云やと思ふ事さ
きへ形高ヤ〳〵もふコリヤお里へ注た様どして此事よろかい
る方ゞ宜らふイヤ〳〵跡で忘れたらさぞお可成ずであろふが行く
も氣づのひ何ぞ仕様へ参ろいナア

江戸小四郎義時　堀田兵衛尉カ今合
依友四郎兵衛忠伝

●市川図十郎
△市川左図次

●六波羅よりのお下知ゝそ江間の小四郎義時が召捕に向ふたりあん
びやうはてなこめを清よ△やアなこまおとうきつくはいおごく家
時なんどゞざん云ゝより漁くゝどのゝ正ふしんくゝり世ゝおち武者
とゝりにまくと直ゝ君はゝめ郎〳〵も把まるつこのあくぞ正ばなこ
国をうくゝいゝれ国●ソリヤ夫なゝ正ばもつて正ふしんそゝ時義を
まゝ罪なき次第を記いでお義の道をたてざるゞ日ゝげもの来る為
をもつて親ゝ立いりたんも心宿様をいゝせハこそ我も対ゝ向ひし
ゝりゝ不の法まもとりゝ上ハなゝ目を清るいもちろんゝそいゝ正ふ
ゝとハ申ふさ正すゞ△イヤたとゝ時義をまつとそも猛くゝどのゝお

うたがひなき時義のあるべきやまと君の世先深くしゝ死生とと
もにいさぎよくこむ於でうんつくるく浙人の者ゝ八方を取囲まれ
しゝ上らハ主君の世先深くしゝ死生とと
げんといふすのとき後ごげ宋さバ小四郎どのとそいぐで用捨ハい
たさんや判官どの〻屋こゝたる堀川殿を切いてさいごの場
所に宋さんとハ君臣ゝ似て君臣宋ど後日ゝおとうのるゝを決ハ
こゝ所にうざるゝ〻何んと心ばせバ十郎そもそんのいふんハ
ざんじやの者とハゆゝ判官どのゝもあやまりの多きゝもいと
ず如何とかゝバ強くゝ侵落ゝ上信坊をこの堀川に対

とうゝ上一ゞこれ第一のケ條ゝすべずのをの臣として又ゝ旅ときゝ後
のゝ成ぶ後ゝ上ゝどの〻余とうけ帝王の吉後加ゝ戦ゝの御智
ゝ者たゞう者どもゝ多人数付て取果ゝバその罪ゝ逃ゝおよぶ者ゝ
判官どの〻身ゝかゝり臣下の者ゝその罪ゝ重ぬるゝハ法ゝそゝ
君のおゝのゞゝ上ゝすゞたゞ不君の名ゝとゝくゝりゞたゞしゝ奥ゝ
しゝ平ゝ華どものゝ手ゝゝくゝり赤恥の恥辱ゝとる所ゝ死ゝしゝの後の名
とおゝしゝ武ゝとおゝもゝ上ゝバ接縁ゝ所ひいさき能く切腹後世義と
きゝこゝ上ゝすゝ見分宋さん〻ハ〻かたゞけゝさゝゝ血氣ゝ上ゝ
あくゝ近ゝも勇ゝとゝるゝてお果んとおもひ〻ハ我後智ゝ上ゝ壮年ゝ

且ど義時どの理非百かまけんこつき落きいどを仕れ人あ
とぞ永程縁下さるべし●さてぐ為ぞ伝部理りいと舎弟せしんよ
強こ民し、然くべ義時分ぞ背ぞくかいしやへ、ぞーてとこ来るぞ
〈スリヤ百ういしやくやさるこナ北条どの、江子息ぞ仇情落ぞハ
素期のお懐お礼の者しハ主君けりぞ先次たぞ日る迄一刀実殿へお
四ぢりもふーぢ●扨ハ夫なる一刀ハ剥皮どのより拝領とナ〈弓
矢の家ぞ生涯たるその甲斐ありて奉蔵の弓よ和やうせー星の
うず金峯つも落て廿八日の義経と元義の四月の末ぢ北よ義
孫ぞかぞ故ぞ愛ぞ思ぞども名ハうんぢ迄ぞ依義忠信〈四うあり

義ある武の情け●あらくべ十分夜度せよ〈素期の四接縁金けあ
ーイザ義時どの迄かいしやく●尾ぞの切後尼とぐけーぞ

隅田川名投隅長吹小松　尾上菊五郎

乞近死ぞと思つたも多の用者に踏いて一足跡へ遅水く三ぞぞう
夢の浮ぞ積に北四のぞ石ぞ家たのハコリヤ北弁ぞ放ぞたのぞ約
陸曲めて浪の音湧みの合方（小景おお芸に親の芸藝者に来ぞと云
に成小松川の中一思入有て）小景おお芸に親の芸藝者に来ぞと云
ハ偽り実ハ私ーハ身性ぞ悪く子供の打栖振拝ぞ三年跡迄ハ
子に暴風を石とーて屋ぞ義者偽いて三絃と弾て生鏑のてう
子と合せ客のきげんと取ぞ酒ぞとりもつ軒びねのう遂ふ夫

如何樂しで味まへ迚て来こと情夫の為よ様ごげいを拵へと成
迚バ表向新しもたくに仕合やゝ料理茶屋の遊引に出ゞ出ゞ
愛ゝ情づ出来金の新合ゝ興あの紙已へ情夫ハ行ゝ限り二年ゝ才
俵りの寿ハ大方死んざゝでみゝふゝと別ゝゝ言日と余日ゝ日ゝ百ゝ日ゝ
る出の長やと思ひ白者に生死の程と尼てもゝへバ決て死ぬゝい
ふのとかゝ者おゝ蓋をつゝめて居る間久ゝさんお前にひねきゝされ
切殺迚の宜等に憑て色に出たもの模ハ浅月の俵を遊さうなめ
を迚も思ゝと言分も通さぬ間にお前の身ゝ腹しゝ強ゝて死ぬ已ど
に出たもえハ私ゝ義理にせまつて苦ゝに死ぬといふも是迚俵

に責ら迚苦安い在寧の身心中して係名備と言ひとお殉本の向寓へ
お抑て来たも死迚迚跡へひとり残つて居ると傷放余を捨るの八開化
の世ゝにひゝけぬのゝ四季へ用おりこはき物と呼ゝ言たゝ方と
投て往も死んざと思ふハ必定遅ゝの抑る業づゝいあゝ生死の紙
迚ぬ情夫の別離をたつ叔ゝ一生以地を立退ん○こ迚ゝ付ても久さん
にハお等の毒ざゝを捨りさつきお前ゝたのゝの七日ゝの寿ハ私
ゝがきゝと言向るゝら迷ハぢめいど〳〵行ておく迚ヨ

花川戸助六　　仲の町の場　　市川團十郎

仇の投五丁町へすねをゝんでむやゝらめらハ已ゝ名と少て立ゝ第一ており

が舞るすぐ妙なる大つどすツと潛時己が名をまの掌へ三べん書て
なめろう一生安敵にふられるといふるが長見抑八歩石拵ぐうきも
が大きい遠くへ八重子の茶やきをいたんの歯欠ぢくいをく八山谷の志
密を横手ぞこアにいる近茶のみぢ色のけんうざた男れんの長下
んの排拵ついに引と取さるの長男ざ江戸むくさきのすち生に髪
へ和まこそ五えけ生のあいざうくのぞいてるんう安房上孫が浮世のう
にんこう八相をが殖まだりうに水金乳山のきゑく阪ろく回恵のめん係
近おのお江戸八百八丁にうくま色の長さやう壮丹のもん付も尼后
みまねの長生者芝川左の助白とも又揚巷の助白ともいふ若い者

百を寄て面像を拵まれエ、

切れ興三　げんどう店の衣　市川圓十郎

若ろ和へ感ろ情が仇金のつるのまれたのを如何こめての木更津柄
めぐる月日も三年ご一江戸の配にやアかん面ぞんぞうろく蓮く
らのハッと孫八宮清ても面に交さる看板のきぞが僥倖のさいえ
ひと切まドうこと長名を取はしろりもすりも写とうより別さ時代の
源氏屋主白化ろ悪べいの格子造の外妾とはお報迎えんでも氣
が付めへ

伊達騒動對決の場　細川勝元　市川猿十郎
仁木弾正　尾上菊五郎

勝。此ぐわらん書ハ其方が手跡じやナ　彈。如何も只今御覧の如く　勝。
フウスリヤ此印形も其方の実印じやナ　彈。コハ異な寝ごとの様につ樣
夫とても拙者が家作毛頭違ひハ有りませぬ　勝。左も有バ其方が横悪
相たくさ樣バ嫌ぬコ　彈。然らバ身に取りて横悪事とハ思ひもよ
らぬ義でござり升る　勝。ナヤ何の如何様にしても逃れ返しやうこハ印
形据へし此ぐわら書来是へ来り掛る違ひ印手に違ひ入るゝの
切れし外記が家来の此ぐわら書を密に接合し文書のわり符合した
め其方がぐわらん書の筆意まで寸分違はぬ同筆同印のこと是でも論ぜぬ
と申す　彈。コハ慳なり迷ひなし御仰なりしよを捧へ僞印を残す者が夫

と一目に相わからぬ何とて工を申す可き其ぐわらん書も拙者拵へ
形態を取段め下さりませ　勝。ヤア人面じう心とや云ん國ぞくとハ
汝が事コレ見よ此ぐわら書を書家と云せ肖父此印鑑今まで鏡
に取るぐわらん書の名あてに押たる印形へ引目を入し八察する処
賊座のくみびん盤を引抜印形模たる此漢字ふ切と解らざ
る八系しの眼をくらませるり

影芝居獨戯言九終

明治廿五年三月廿一日印刷
同　年三月廿三日出版

編輯兼發行者　栗原吉五郎
芝區南佐久間町一丁目一番地

印刷者　新井寅三
芝區新櫻田町十五番地

特55
283

影芝居 独稽古

国立国会図書館

074789-000-2

特55-283

影芝居独稽古

好劇山人／著

M25
CEK-0096